

エッセイ 古本屋の仕事場

酒好きの本屋

橋口 侯之介 (誠心堂書店)

江戸の本屋・和泉屋庄次郎こと慶元堂の松沢老泉が書いた文政元年

(二八一八)の九月から十一月までの日記『堂前隠宅記』を読んでみる

(弥吉光長校『松沢老泉資料集』昭和五十七年、書芸堂書店)。

セドリで資金集め

老泉は神田佐久間町で本屋をしていた和泉屋庄八の息子で明和六年(一七六九)に生まれた。初代の没したときはまだ少年だったため、向島辺りで紙漉きをしながら銭を貯め、それを元手に本のセドリをしながら刻苦精励して寛政初年(一七九〇前後)、浅草新寺町に本屋を再興した。

セドリとは、本屋を回って本を仕入れ、それを古書の市や専門店に持って行って利ざやを稼ぐ商いのことで、江戸時代からの用語である。老泉は若い頃、この商いで古本を売買しながら開業資金を貯めたというのだ(森岡三郎『書誌学論攷』、青裳堂、昭五十四年など)。開業後は、漢籍と天台宗系の本をよく出版し、いちやく江戸の中心的な本屋に成長する。書物問屋仲間ではたびたび行事の当番を勤めていた。この日記の時期も行事を担っており、

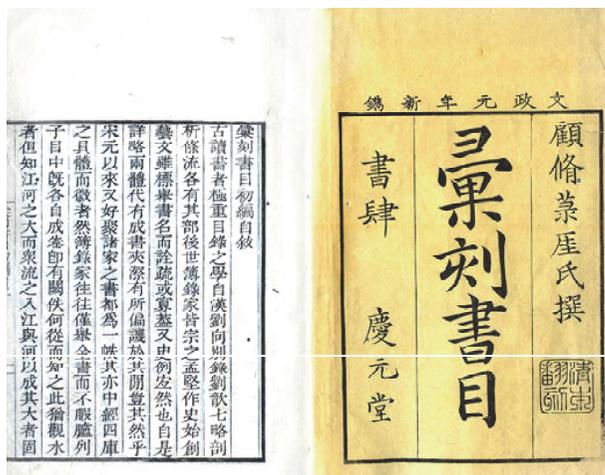
その後任選びに苦労した記事が載っている。

老泉は隠居後の号で、三代目となった慶元堂・和泉屋庄次郎の店は浅草の本立寺門前にあり、隠宅とは歩いて数分とかわらない距離である。日記には「本店」と出てくる。近所にはさらに娘婿とおもわれる松沢庄八

(永覚堂)の店があり、西国横山町には慶元堂から独立した和泉屋金右衛門(玉巖堂)の店もあり、これらの間で緊密に連携をとりながら商売をしてきたことが日記からうかがえる。

老泉は、亀田鵬斎、屋代弘賢、狩谷掖斎ら当時の学者との交際も広く、日記の中にも書物奉行・近藤正斎宅で貴重本を拝見したり、自店にある珍本を見せるなど頻繁なやりとりを記している。

若い頃から研鑽を積んで得た知識をもとに、自らの著作も出版した。漢学の『経典釈文盛事』(文化七年刊)や『彙刻書目外集』(文政三年刊)がそれである。彙刻書目とは、漢籍の叢書や合刻(複数の著作を含む版本)の収録品を目錄にしたもので、清代の顧修が編集した『彙刻書目』十巻が原



本だ。老泉はこれに漏れた作品名を収録した増補本を書いたのである。このほか、版本にはならなかったが、『経籍答問』も書いている。書物の知識を生かした考証で、現在も方々の文庫・図書館で写本が残されている。

眼力があつて、忙しく働くこの人の仕事の中心は古本である。新刊の本づくりはその合間にこなしている程度で、多くの時間は各所を歩いて本を探し、評価し、買入れすることに割いている。これは古本屋の仕事そのものである。買った本は、傷みなどを修復し、落丁がないかどうか検査して息子の店や娘婿の店に卸して販売した。そのいろいろな仕入れ本に、五山版や古写本などの稀覯本が入っていることがたびたび日記に記されている。その最たるものは宋版の『爾雅注疏』だろう。常陸の寺から出たものらしい。外出しない時は、もつばら本の繕いをしていたが、この『爾雅注疏』はことさらていねいに修復した。ただし、この本がどこへ売られたのか不明である。

この日記では冊数の欠けた本の部分を「半本」といつているが、これは端本と同じである(半端本ということ)。これを探して欠本を埋めていくことで、より完全な本にして商品とする。老泉は、毎日のように他店を歩いて半本を探している。当時の本屋はどこでもこのような行為をしており、欠本となつている巻数や、半本でもつている本を一覧した帳面「半本帳」を作成していたようだ。それで各店同士で融通し合い本を揃えていく。ほとんどの本屋が古本の流通に深くかかわっていたことがこれで理解できる。江戸の本屋が出版を中心に立ち立っていたのではなく、さまざまな本の流通にかかわって生計を立てていたことが、ここからも理解できよう。

精力的に本屋回り

その日常の仕事ぶりは精力的に本を集めることに費やされていたといつてよい。少し長いが九月二日の記事を紹介する。旧暦九月の午前四時に起床。まだ暗いので提灯を持つてまず娘婿の永覚堂に向かう。前夜の荷物を受け取る。次に横山町の金右衛門に寄るが、まだ起きてこない。馬喰町の川村儀右衛門もまだ寝ていた。起きるのを待つて、金右衛門には五山版の貞治四年(一三六五)刊『夢窓国師語録』を見せ、川儀へは先日借りた『左伝注疏』の内の一冊を返し、『史記』の世家部二冊を貸した。日本橋へ出て松本平助の店に寄つたが、ここも家内の者も店の衆も起きてこなかったが、下女が起きていたので『三才図会』の端本の事を頼んでおいた。その足で芝に向かい、まず神明町の和泉屋吉兵衛を尋ねたが、必要な端本は無いようだったが、医書の良い本を見せてもらった。同じ町の岡田屋嘉七へ行き、種々の端本を合わせ、揃つたものを預けておいた。和泉屋新人にも寄つたが留守なので会わなかった。途中、芝の宇田川町の酒屋で一合半の酒を呑む。肴二種共で七十二文だった。帰路もいくつかの本屋に寄り、日本橋四日市の西宮弥兵衛では宋版で金沢文庫の印がある『太平聖恵方』の小児部と同書の内の「傷寒門」を古写本でよく見せてもらった。天下の稀本で御神君(家康)から尾州侯に進呈されたもので、現在も逢左文庫にある本のうち、何らかの事情で外に出てしまったものだろう。何とかしたいものだと思った。山城屋佐兵衛ではその店の半本帳を見せてもらい、『農業全書』の巻五と十、『論語国字

解』の四巻を注文した。

結局、この日は浅草を出て、日本橋界限を経て芝まで足を伸ばし、日本橋に戻り、通りの本屋を軒並み覗いて南伝馬町を歩くなど、十二軒以上の本屋に立ち寄った。そこでこれはと思う本を買い取ったり、善本を見せてもらったりしている。さらに古道具屋も覗くと道具に混じって本を売っていたが、そこで珍しい本を見つけた。

これだけでなく、途中、当時（文化五年から）書物奉行を勤めていた近藤重蔵こと正齋宅に上がり、金沢文庫本『群書治要』や、清朝の学者・阮元の書き入れがある『十三経注疏』、足利尊氏ゆかりの伊豆国般若院が蔵している『大般若波羅蜜多経』などを見せてもらっている。また、金右衛門のところにある五山版の『夢窓国師語録』は近藤正齋が識語を入れて狩谷掖齋に売ることになった。

酒を切らさず呑める毎日

早朝から一日がかりで日本橋から芝を回って歩いている最中にも酒を飲んでいたが、老泉は相当に酒好きで日記には毎日呑んだことが出てくる。外回りをしたあとに「帰少々呑帰宅」「新助方にて酒でる」「酒一升新助へ渡す」「うなぎにて飯振る舞い、酒少々呑」と連日酒がきれない。一日自宅で本の繕いをした日は昼頃から前夜もらった焼き物を肴に呑み始め、やってきた慶元堂現主人や板木屋、伝馬町の姪っ子を交えて夕方まで酒宴が続いた。別の日には修復作業の後本店で酒を少々呑み、その

後仕事に出かけ、途中酒をまた呑んで帰宅した。

日記中の老泉はまだ四十九歳だが、隠居して店を息子にまかせており、自分は好きな本屋巡りに明け暮れていた。その過庭で珍しい本に出会うこともあり、さぞ楽しかっただろう。ふつうのセドリと違うのは、本に関する知識が深く、かつ同業ばかりでなく、当時一級の書籍研究者たちとの交際もあって、稀覯本に接する機会がかなり多いことである。

その上好きな酒を遠慮無く呑める。文政五年、この日記の四年後に五十三歳で亡くなる。当時としては、平均的な年齢かもしれないが、酒を控えていればもう少し長生きできたのではないかと思ってしまう。

日記にはさまざまな本屋が登場するが、半分以上は『近世書林板元総覧』（井上隆明編、青裳堂書店）にも載っていない店で、彼らは出版をする書物屋ではない。例えば「川八十」なる人物に自分の半本帳を預けて探させているし、「道甚」という人物から古本を見せてもらっているのだが、いずれもセドリを業とする者か床店の古本屋ではないだろうか。老泉はそういう人たちとも積極的にかかわっている。

書物問屋仲間は、出版をする店Ⅱ板株を持つている店の集まりであり、板株を持たずに本を売買する者を世利子・売子と呼んで区別してきた。老泉の和泉屋はれつきとした板株を持った本屋だが、その仕事ぶりは世利子たちと変わらない本の収集と売買をしており、江戸時代の本にかかわる商いをする者のある意味で共通点があったようである。